

## トピックス

### 1.茨城県森林組合連合会の

令和8年度の取組方針について

代表理事専務 磯邊 晋吾

### 2.病虫害防除について

業務部 業務課 森林整備係長

村上 国徳

### 3.新入職員紹介

～製材業を経験して感じたこと～

業務部 販売課 共販係

後藤 泰

～現場での実感とこれからの決意～

業務部 業務課 森林整備係



常陸太田市のかたち



## 茨城県森林組合連合会の 令和8年度の取組方針について

代表理事専務 磯邊 晋吾



### <はじめに>

令和8年度は、高市政権による「責任ある積極財政」が展開されていますが、解決が見えないイラン情勢の影響などにより株価が乱高下するなど、安定した経済活動が見込まれない状況でスタートしました。

木材の最大の需要先は建築用材ですが、建設費の高騰などに起因して令和7年度の新設住宅着工戸数は前年度比12.9%減の71万1千戸余となり62年ぶりの低い水準となった、と報じられたところです。

林業・木材産業のみならず、広範囲の産業において今年度の経済見通しが立たない中ではありますが、業界の明るい未来を祈念しつつ、当連合会の今年度の取組方針をご紹介します。

### <令和8年度の取組方針>

10年後の当連合会の目指す姿を示し、令和4年3月に策定した「JForestビジョン2030」は、昨年度をもって計画期間の折り返しとなったため、前半期間の取組成果を検証し目標数値を見直すとともに目標項目の追加を行ったところです。

この目標数値の見直しについては、昨年度、茨城県の伴走支援をいただきながら各森林組合で策定した「中期経営計画」における数値等を踏まえたものといたしました。

今年度はこれらの計画の目標達成のため、各部門で次のような取組を行ってまいります。

販売部門では、共販における会員森林組合からの出材を促進し取扱量を増大させるとともに、関係機関の協力をいただきながら付加価値を高める選木方法の可能性を検討いたします。また、協定販売や直送体制の強化にも取り組んでまいります。

森林整備部門では、「茨城県森林環境税」を財源とした再造林等の森林整備を推進するほか、病虫害防除事業についてはこれまでの実績を活かした事業提案を行ってまいります。さらに、ICTを活用した効率的な現場管理システムを構築してまいります。

加工部門では、間伐材等を丸棒に加工し製品化した防風柵・杭木などの公共事業資材の利用促進や、木製加工品の販売促進・新商品開発を行い、県産木材の利用拡大に努めてまいります。

指導部門では、担い手となる人材の確保・育成を計画的に行うほか、職員のスキルアップを目指し各種の研修を開催いたします。また、職員提案制度の活用などにより、全ての職員が当連合会の経営を意識する環境づくりに努めてまいります。会員森林組合に対しましては、各部門の収益を活用し、経営基盤強化や前述の「JForestビジョン2030」「中期経営計画」の目標達成に向けた支援を行ってまいります。

## 病虫害防除について

業務部 業務課 森林整備係長  
村上 国徳



全国的に被害が続いている松くい虫については、茨城県内においても沿岸部を中心に被害が発生しています。特に海岸林は、防風・飛砂防止や潮害防備など、地域の暮らしを守る重要な役割を担っていることから、被害の拡大を防止するため、さまざまな対策が講じられております。

まず、松枯れ防除技術の一つとして予防散布があります。これは、媒介昆虫を防除対象とすることから間接防除と呼ばれており、ヘリコプターによる空中散布及び動力噴霧器による地上散布があります。実施時期は、媒介昆虫であるマツノマダラカミキリが発生する5月から7月にかけてで、1回から3回散布を実施しております。

当会では薬剤散布の効果を最大限に発揮させるため、管理者及び作業技術者をはじめ、作業に従事するすべての職員が松くい虫被害の仕組みを十分理解した上で施工に当たっており、薬剤が対象木の樹冠上部（当年枝）に均一に付着するよう努めております。また、周辺環境への配慮の観点から、事前の現地確認も徹底しております。

次に、防除技術の一つとして、マツの休眠期である12月から翌3月にかけて実施する樹幹注入があります。これは、マツの幹に穴を開けて予防薬剤を注入する方法であり、原因虫を直接防除することから直接防除と呼ばれております。

樹幹注入については、薬剤の効果を十分に発揮させるため、雨天時の作業を避け、晴天が続く日を選定して実施するとともに、衰弱しているマツや枯れ始めているマツなどは、十分な効果が期待できないことから、事前調査を行い他の防除方法を検討します。

このほかの方法として伐倒駆除があります。これは、被害木を林外へ搬出し、チップ化、又は焼却等により処分する方法のほか、伐倒駆除用の殺虫剤により材内の害虫を駆除する薬剤処理等があります。

また、安全対策については、伐倒作業中、伐倒木の樹高の2倍の距離を危険区域として立入を制限するとともに、薬剤を取り扱う際にはガスマスク（防毒マスク）、ゴム手袋及び保護メガネを必ず着用する等徹底しております。燻蒸処理においては、薬剤から発生するガスによって殺虫を行うため、シートの破損が生じないように細心の注意を払いながら作業を実施しております。

マツ林や広葉樹林は、美しい景観を形成するだけでなく、防災、水源涵養、生物多様性の保全など、多方面にわたる公益的機能を有しております。一方で、病虫害被害は一度拡大すると短期間で広範囲に及ぶおそれがあるため、早期発見及び迅速な防除が極めて重要です。今後も県、市町村、関係機関及び地域住民の皆様と連携しながら、海岸林をはじめとした森林の公益的機能を維持し、安心・安全な県土づくりに取り組んでまいります。

# 新入職員紹介

製材業を経験して感じたこと

業務部 販売課 共販係 後藤 泰



私は、本年4月に本会に入会する前、17年間にわたり丸太の製材業務に従事しておりました。以前の職場では、昔ながらの製材機を用いて、杉丸太から板材・垂木・瓦棧など様々な製品を製材し、日々丸太と向き合いながら仕事をしてまいりました。

現在は、その経験を活かし、販売課において共販事業に携わっております。これまでは丸太を買う側でしたが、今は「売る側」として新たな視点で業務に取り組んでおり、一日でも早く仕事を覚え、本会の一員として力になれるよう努めております。

以前の職場では、曲がりや節が多く、また年輪の粗いもの、反対に通直で均等に年輪が入った美しいものなど、様々な丸太を目にしてきました。そのたびに、「これらの木はどのような環境で育ってきたのだろう」と疑問を抱くことがありました。しかし、これまではこれらの疑問を深く学ぶ機会が多くなかったため、現在の業務を通じて森林や木材についての理解をさらに深めていきたいと考えております。

そして、以前の職場では何気なく製材していた丸太が、茨城県内の様々な山林で伐採され、原木市場に集まり、選別・共販されたあと入札により取引され、製材所へ届けられていることを改めて知りました。一本の丸太が製品となるまで、多くの方々の手がかかっていることを実感し、木材流通の奥深さを感じております。

連合会に入会してからの日々の業務の中、数年前に発生した「ウッドショック」のことを思い出しました。新型コロナウイルス感染症の影響により、コンテナ不足などで外材の輸入が停滞し、世界的な木材流通に大きな影響が生じました。以前の職場でも大きな混乱があり、日本の建築業界では、建築資材の多くを輸入材に依存していたことを実感し、大変驚いたことを覚えています。

その時茨城県内にも豊かな森林資源がある中、なぜ輸入材への依存が高いのか疑問を抱きましたが、人手不足や価格面での優位性など、様々な背景があることを知り、それでもなお、県内には良質な木材資源があるからこそ、茨城県産材がより広く活用されることを願う気持ちは今も変わりません。

これからは、共販事業を通じ木材流通の一端を担う立場として、これまで培ってきた製材の経験を活かし、製材所の皆様に喜んでいただけるような業務に努めてまいります。また、茨城県産材をはじめとする国産材の普及に貢献し、森林・林業の発展に少しでも力を尽くしていきたいと考えております。



## 現場での実感とこれからの決意

業務部 業務課 森林整備係

雨宮 直生

私の林業への関心の原点は、今から約10年前、小学3年生だった頃にまで遡ります。当時のニュース番組で「地球温暖化」という深刻な環境問題を知り、子供ながらに「地球のために私には何ができるだろう」と真剣に考えました。その結果、行き着いた答えが「植物を大切にすること」でした。二酸化炭素を吸収してくれる植物こそが環境危機の救世主になると信じ、それ以来、私の関心は常に植物や自然に向けられるようになりました。

小学5年生の時には、自分が読んだ本に関わる会社を職場見学出来る学校行事があり、「日本緑化センター」を訪ねました。そこで植物や緑化に関する専門的な知見に触れたことで、「将来は植物に直接携わるような、農業や造園業などの仕事に就きたい」という将来の夢が明確な目標へと変わりました。その夢を叶えるため、高校は農業の専門学校へと進学し、大学へ進学する際には、地球温暖化防止の要であり、最も多くの二酸化炭素を吸収・固定する森林に着目し、その森林をフィールドとした林業に関する専門知識を本格的に学びたいと考え、進路を決めました。

大学での講義において、現在の日本の林業が直面している「担い手の深刻な高齢化・後継者不足」や、「かつて先人たちが植えた樹木が、伐採適期である60年を迎えても活用されずに放置されている」などという厳しい現状を知り、幼い頃から植物に携わりたいという想いもあったことから「少しでも林業の現場の役に立ちたい」と思い、本年4月、連合会の現業職に就きました。

現業職として県内の現場に立ち、日々先輩方の指導のもとで業務に励んでおり、木を植えるための準備である「地拵え」やその後の「植え付け」、海岸林の「松枯れ調査」といった作業を日々経験させていただいています。実際の山での作業は想像以上に体力を使い、同時に非常に緻密な世界であると肌で感じています。斜面での足場の確保や、一本一本の苗木を丁寧に植えていく緊張感、被害木の兆候を見落とさない難しさなど、毎日が新鮮な発見と勉強の連続です。自然相手に厳しさを痛感しつつも、私はずっと関わりたかった森林を守り、育てる仕事の第一歩に携わることで、地域の方にも役立てているのだという充実感を得ています。その中でも特に印象に残っているものが、海岸付近の田畑の存在を目の当たりしたことです。海岸林を造成し、守り育てることで、飛砂や潮風などを防ぎ、その結果、後背地で野菜や稲が育つことを考えると自分が携わる仕事が地域の方に役立てているのだと、日々現場に向かう中で強く噛み締めています。

私の将来の目標は、現場での実務経験を積み、海岸林を脅かす「松枯れ」の病害虫

防除事業に深く貢献すること、そしてマツを始めとした樹木の保護・育成に係るその専門性を高めて「樹木医」の資格を取得することです。まずは現場での技術の一つ残らず吸収し、将来的には樹木医としての知識を活かして病害虫の被害を防ぎ、「現場のことも、木々の診断や病気対策も彼に任せれば安心だ」と、組織からも地域の皆様からも厚く信頼される存在を目指して、地道に努力を重ね、県内の森林に良好な関係に導けるよう貢献できればと考えています。

私自身も得意不得意があり、現場で作業を行うときに苦しむこともあります。道具の使い方などの工夫や何度も繰り返し作業を行うことでどのように動けば良いのかわかり、状況に応じて考えて動くなどの工夫を行うことで、不得意なことを克服し、現場に必要な体力や精神力、知識、技術を磨きながら日々精進を続け、業務に取り組んでまいります。



茨城県森林組合連合会機構図(令和8年度)

RB.4.1

